

佳作

あの夏が僕に教えてくれたこと

秋田県大館市立田代中学校

3年 小笠原 定仁

中学2年の夏、野球の大会でショートを守っていたあの日、試合は白熱し、緊張感が高まる中、4回裏に大きな出来事が起こった。

ショートに飛んできた打球を僕は迷わず捕球し、すぐに送球を試みた。しかし、その瞬間、痛烈な痛みが肘に走った。次の瞬間、僕は、膝をつき、周囲の声や応援の音も遠のき、ただ痛みだけが心に響いた。

すぐに病院で医師の診断を受けると、右肘の剥離骨折と判明し、手術が必要となった。その時の僕は、大好きな野球ができなくなるかもしれないという不安と、自分の体の不調に戸惑いを感じていた。

だけれど、そんな僕に救いの手を差し伸べてくれたのが、先輩や先生の言葉だった。

「定仁にキャプテンをやってほしい」と伝えられたのだ。その一言が、僕の心に火をつけた。

たくさんの人たちに支えられてなんとか手術を乗り越えることができた。しかし、僕を待っていたのは長くてつらいリハビリだった。最初は肘が伸びないし曲がらなくて大変だったけれど痛みと闘いながら毎日少しずつ前進した。仲間たちの応援や先生の励ましを胸に僕は諦めずに努力し続けた。チームではできることはかぎられてしまうものの、メンバーへの声かけやサポートに全力を注いだ。

そして1年後、怪我も完治しいよいよ夏の大会が始まった。僕はキャプテンとして、チームを引っ張った。初戦と2回戦を見事に勝ち進み、ついに決勝戦に進出した。決勝の舞台はみんなの目標と希望が詰まった場所だった。僕たちは全力を尽くし、最後まで諦めずに戦った。試合はすさまじい緊張感で少しも気を抜けなかった。

最終回、5対4で勝っていた。あとスリーアウトがものすごく遠く感じた。先頭打者が打った打球が僕のほうに飛んできた。焦らずしっかり捕球し送球に移りアウトにした。このとき何かを乗り越えた感じがした。再び僕のところに打球が飛んできたが、このときの僕にはネガティブな発想など少しもなかった。素早く捕球し流れるように送球に移りアウトにした。

「あと一つで優勝。」

そんな思いが込み上げてくる。自分の心臓の音がきこえて脈が早くなってい

くのが分かった。たくさんの人たちが応援してくれているのに不思議と静かだった。ピッチャーが最後のバッターを三振で抑えた。全員でマウンドに走っていき、喜びを分かち合った。僕はこの瞬間を一生忘れないだろう。あの夏の苦しい経験と努力があったからこそ、この勝利は単なる勝利以上の何倍もの価値があった。試合が終わったあとには多くの人たちに感謝を伝えた。選手も監督も応援してくれたみんなも全員笑顔で、本当に最高の日だったと思う。

家に帰ると多くの人たちから

「優勝おめでとう。」

とメッセージが届いていた。何か込み上げてくるものがあった、気付いたらスマホの画面に涙が落ちていた。去年、先輩たちの夏を終わらせた僕が少しは成長できたのかなと、うれしい気持ちでいっぱいだった。

この経験は、僕にとって大きなチャレンジだった。怪我という逆境に直面しながらも、諦めずに努力し続け、自分の目標をひたすら追いかけた。その結果、仲間とともに勝ち取った優勝は、僕の人生の宝物だった。

今年と去年の夏に味わった勝利と逆境の両方は僕の人生に大きな影響を与えた。去年の苦しみも今年の喜びも、すべてが僕の心に深く刻まれている。

この経験を胸に、僕はこれからもどんな困難が待ち受けていたとしても、決して諦めず挑戦し続ける。怪我を乗り越え、仲間とともに勝ちとった勝利の喜びを、次なる目標に向かう糧として、自分の無限の可能性を信じて努力していきたいと思う。

あの夏は、ただの夏ではなく挑戦と成長が表れ、自分の可能性を信じ続け諦めないことの大切さを教えてくれた舞台だった。僕の未来にはまだ見ぬ壁や困難が待ち受けているのだと思う。でも、そのたびにあの夏の自分を思い出し、絶対に諦めない。あの夏が教えてくれたことを胸にどんな困難も乗り越えていく。